

学校 だより 郷音ひびき

第109号
令和6年1月
発行
山崎西小学校



新年をむかえて

校長 田中 美和子

お正月の松飾りもとれ、新しい年が本格的に動き始めています。ただ令和六年は、新年の寿ぎに関係なく天災は襲来することを痛感した幕開けとなりました。石川県能登半島を震源とする大地震が起こり、建物の倒壊、大規模火災によりかけがえのない命が奪われてしまいました。残念で仕方ありません。ご冥福を祈るとともに、被害に遭われ避難生活を余儀なくされている方々のご無事と、心穏やかな日が一刻も早く戻ることを願うばかりです。

この寒さの中での救助活動の様子を胸が詰まる思いで見ていると、二十九年前の一月十七日におきた阪神・淡路大震災を思い出します。当日の明け方、寝床で四ヶ月のぐずる我が子を抱っこしながらウトウトしていると、ドーンという大きな衝撃がありました。何が起こったか考える間もなく、とっさに我が子の上に覆い被さっていました。しばらくしてからテレビに神戸の街が映し出され、宍粟で体験した大きな揺れも地震だったことがわかりました。まるで白黒テレビかと思う明け方の神戸の街。上空からヘリコプターが撮影する様子を見ながら、家が壊れている、ビルが倒れている、高速道路が倒れているひどい状況だったのに驚きました。あちこちで黒い煙があがって火事だとわかって、何もできない人間の無力さに呆然としていました。

阪神・淡路大震災での経験から得た教訓を生かして、今回、兵庫県でも早くから被災地支援の活動に取り組んでいます。迅速な情報連絡、

被害規模の推計、広域応援体制の整備がなされ、初動体制に遅れがないよう国全体でも動いています。過去の震災から学んだ知識を集め、進歩した技術を駆使して、天災に備えているはずですが、それでも、救助や支援活動は難航しています。高齢化が壁となつて耐震化が進まなかった家屋の倒壊、土砂崩れや道路損壊、交通網の寸断と予測されていても減災できなかった事態に心痛めるばかりです。

阪神・淡路大震災ではたくさんボランティアが被災地に駆け付け、災害の救援や復旧に関わり、欠かせない存在であることを印象づけたので、日本におけるボランティア元年となりました。東日本大震災、熊本地震と甚大な被害が起こるたびにそのノウハウを磨き、今回も、「必要な支援」「被災者のニーズ」をまずは把握して支援にあたらうとしています。能登半島被災地は、通信網やインフラ復旧の遅れ、不十分な医療や支援物資、孤立状態など、さまざまな苦境に直面していて、予断を許さない状況でありますが、今自分にできることを考え行動していきたいと思っています。

学校での防災教育では、火災時と土砂崩れ時の避難訓練を実施しました。秩序を守って避難する子どもたちの姿に安堵しています。一月十七日防災とボランティアの日には、地震時の避難訓練と追悼式を行います。訓練通りいかない事態も想定しながら、子どもたちを救うために、いつ起こるかかわからない天災に今日も備えています。

本年も、保護者や地域の皆様方のご理解ご協力をいただきながら、職員一同全力で取り組めますので、ご支援、ご協力よろしく願います。

タブレット端末の活用について
ICT担当 川上 哲平
本年度は研修のテーマを「自ら学びに向かい、高め合う子どもをめざして主体的な学びとなるICT機器の効果的な活用」とし、取組を進めています。これまでの実践を少し紹介します。

・アンケート作成ソフトの活用

アンケートの取り方の学習で、アンケートの作成・実施・回答の回収を端末を活用して行いました。紙を使うことに比べて、配布する時間や回答を回収する時間、集計する時間を大幅に減らすことができました。さらに、回答がリアルタイムで分析できるので、結果を考察したり話し合ったりする時間が多くとれました。授業だけでなく係活動でアンケート作成ソフトを活用している児童もいます。

・協働学習

自分の考えをカードにかいて送ったり、そのカードを児童間で共有できたりするソフトの活用を進めています。教室の大型ディスプレイに全員分のカードを一覧にして映すことでそれぞれの児童の考えが共有できます。さらに、一人ひとりの端末でも全員分のカードを見ることができると、カードを選んで自分の考えと比較したり考えるヒントをもらったりしながら学習を進めることができます。

端末を活用していくことで、データ（文書や写真、動画など）が増えてきました。これまでの学びを活用するために、データを検索できるようにしておくことがとても重要です。そのために、低学年から文字入力にチャレンジしていきます。文字の入力方法には、キーボードのローマ字入力やかな入力、音声入力や手書き入力、フリック入力やトグル入力など様々なタイプがあります。入力のスピードを上げることや、授業の中で入力を行う場面について研修を進めていきたいと思っています。

児童は、端末の操作に慣れることで、自ら端末の活用方法を工夫したり新しいことを発見したりすることができるようになりつつあります。これからも、安全で正しく利用するために、『タブレット活用のルール』を確認したり、相手を思いやるルールやマナーなどを身につけたりする情報モラル教育を推進していきます。ご家庭でも学校の端末やスマートフォンなどの使い方やルールなどを確認していただきますようお願いいたします。

端末を活用するだけでなく、興味をもって学習に取り組めることがあります。そのよさもいかしつつ、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら深い学びの実現ができるように端末の効果的な活用について研修を続けていきたいと思っています。

1・2月の行事予定

【1月】

- 17日(水) 地震防災訓練・追悼式
- 19日(金) 豆腐づくり 3年生
- 20日(土) 宍粟市書き初め展
- 21日(日) (防災センター)
- 25日(木) PTA本部役員会・理事会
- 26日(金) ファミリー読書

定時退勤日 毎週金曜日：19・26日

【2月】

- 2日(金) 新入生入学説明会
- 11日(日) 建国記念の日
- 12日(月) 振替休日
- 14日(水) PTA授業参観・学級懇談
山崎西中学校入学説明会
- 16日(金) 新入生体験入学
- 22日(木) ファミリー読書・上靴洗濯日
- 23日(金) 天皇誕生日

定時退勤日 毎週金曜日：2・9・16日



読書感想文コンクール

本年度の六栗市読書感想文コンクールの入選者は次の通りでした。

特選	秀作	入選
四年 ○○ ○○	二年 ○○ ○○	一年 ○○ ○○
	六年 ○○ ○○	三年 ○○ ○○
		五年 ○○ ○○



その中から、特選・秀作の三作品を紹介します。

『おいしい給食のひみつ』を読んで

本屋さんに行ってこの本を見たとき、ほくにびつたりだと思ってこの本を選びました。ほくは、給食センターで働く人たちが毎日どんなことをしているのかが気になっていたので。

この本を読んで心に残ったところは、栄養士の山川さんが教室に行ってクイズを出していたことです。クイズを出題して食べ物や栄養について伝えて、食べることの大切さを教えているところがすごいと思いました。一年生にもわかるように、みんなが楽しめるように考えるのは大へんだと思うからです。また、山川さんが調理員さんの体調管理や調理のアドバイス、味見や欠席者のいるクラスの給食の量を調整していることも初めて知りました。

毎日のこんだてを考えると、季節に合わせて地元でとれた材料を使って栄養たっぷりの給食を作ってくれていること、これは六栗市の給食センターでもされていることだと思います。

本の絵を見て不思議に思ったこともありました。それは、調理する人の手ぶくろのことです。「どうして、色のついた手袋をつけているのだろう」と思い、調べてみました。調理中に手ぶくろがやぶれて給食の中に入ってしまうと、青色の手ぶくろだとすぐに見つけることができます。エプロンも調理のかいで色分けがしてあり、一目でだれ

が何の仕事をしているのかわかるように工夫されているのが分かりました。

ほくたちの地いきの給食センターも、この本の中みたいに毎日おいしい給食を作って学校にとどけてくれているんだと思いました。

一日何干食という量を作るとは、ほくにはそうぞうできません。栄養のことを考えながら、たくさん量を料理する給食センターの人たちはすごいと思いました。

ほくは、食べ物のアレルギーがあり、食べられないメニューがあります。でも、六栗市は月に一回「食育の日」があり、地域の食材だけで作られたメニューが出ます。アレルギーのある子どももみんな同じ給食が食べられてとてもうれしいです。みんなできいしょに食べるとさらにおいしく感じます。

ほくはこの本を読んで、給食が学校に届けられるまでに山川さんみたいな栄養士さんがこんだてを考える時間、たくさん調理員さんが協力して調理する時間、食中どくが起きないようにきちんと消どくやかた付けをする時間など、たくさんの方がたくさん時間を使っているのことが分かりました。「みんなにおいしく食べてほしい」「みんなに元気に過ごしてほしい」という思いもたくさんつまっていると思います。これからは給食を食べられることに感謝して、「いただきます」と「ごちそうさま」を心をこめて言おうと思いました。

『すなおにあやまる』をよんで

一年 ○○○○

「けんかのたね」ってなんだろう。うえるとかんかの花がさくのかな。ひょうしには、おこった顔の人がいてこわいなあと思いました。こまった顔の人もいるからけんかはいやだなあと思いました。ひまわりみたいにたねがたくさんできると、けんかだらけになってたいへんなことになるぞと思いました。読んでみると、とう場人ぶつやどうぶつのもやとりがともおもしろかったです。

この話の中で、一番心にのこったところは、ねずみが自分がわるいとみとめたことでせんぶのけんかがおわたるところです。ほくも時どき弟とけんかをしてしまいます。ほくは、自分がわるいと分かっているけど、すなおにあやまることが手

です。あやまらずにいると、どんどんけんかがはげしくなっていくと思います。この話の中でねずみは、言いわけをせず自分がわるいとみとめました。それをきっかけに、みんながなかなかおりをすることができました。そんなねずみをほくはかっこいいなと思いました。ほくもこれからは、自分がわるいと思った時は、ゆう気を出してすなおにあやまるようにしたいです。けんかの時に、お母さんはいつも「先にあやまった方がえらいんだよ。」と言います。そのいみがよく分かりました。

ほくにも気づいたことがあります。それは、さいしょは小さなことがげんいんでも、それがどんどん大きくなっていくことです。ニューズで見るせんそうにもなっているのかなと思いました。せんそうもさいしょは小さなことがきっかけではじまったのかなと思います。けんかとせんそうはぜんちがうけど、わるい方がすなおにあやまって早くせんそうがおわればいいなと思います。

ほくもこれからきつとけんかをすることがあると思います。その時は、このお話を思い出して、大きなことになってしまいう前に、わるいと思っただけすなおにあやまってなかなおりでできるようにしたいです。

『五番レーン』を読んで

六年 ○○○○

ほくは、三歳の頃から水泳を習い始め、今はサッカーも習っています。中学校の部活動ではどちらを選んだらよいか迷っていて、「五番レーン」という題名とプールに飛び込む表紙の絵が気になりました。「もしかしたら、自分の答えが見つかるかな。」と思い、この本を読むことにしました。

「五番レーン」の舞台は韓国です。ほくと同じ六年生で水泳部のエース、カン・ナルが主人公です。他校のライバルのチョヒが現れ、ナルは表彰台に立つことができなくなります。ナルは、チョヒの新しい水着を怪しんだり、自分の手の短さを勝てない原因だと思ったりしました。

また、一緒に目標に向かっていたはずの姉が種目転向したことや自分自身の記録を破らないとい

けないプレッシャーも重なり、とっさに最悪な行為を犯してしまいます。その行為を誰にも言えず、水泳に打ち込むこともできず、水泳で結果を出すことができません。

そして、小学校最後の大会の日が来ました。ナルはひたむきにかんばって来た仲間の活躍を目の当たりにしたことで、勇気を出し最悪な行為にけりをつけることができました。試合でライバルに負けてしまったことも素直に受け入れることができたことで、水泳に純粋に向き合う気持ちに戻り、水泳を続けていくというお話です。

ほくは、この本の中でもとても共感できる場面があります。「テヤンは母さんに説明できなかったことが何だったか、今はっきりと分かった。大会で見た水泳部の子どもたちは間違いなく同じ場所にいるのに、彼らにしか見えない世界がある。」ということになります。

この場面で、ほくがサッカーを習い始めた頃は、まだ目標がありませんでした。目標のあった周りの子どもたちの違いが何も言われなくても感じたことを思い出しました。一緒にサッカーをする仲間なのにとっても遠い存在に思えました。そして、コーチが「目標は、自分で決めよう。私の役割は、君たちを横で支えることだから。」と話して下さいました。自分で目標を立てて口に出してみると、そのことがとても意識できます。毎回自分で目標を立ててコツコツ練習を続けていくことで、大きな目標を達成できたこともあります。

この本を読んで、ナルが背負っていたプレッシャーは自分を見失うほど重かったんだと感じました。ほくはまだ、自分を見失うほどのプレッシャーを背負ったことは無く、そんな大きなプレッシャーを感じるような環境に立っているのだからないけど、そんな舞台で戦ってみたい気持ちにもなりました。

ほくはまだ水泳かサッカーで悩んでいるけど、どんな世界を選んででも純粋な気持ちを持ち続けることや自分で目標を見つけること、壁にぶつかっただけときに自分と向き合える人になりたいと思います。